



Title	コメント5 四川における領域化
Author(s)	小島, 泰雄
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニュースレター. 2008, 3, p. 68-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27002
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コメント 5

四川における領域化

小島泰雄

はじめに

今回のワークショップでは土地調査事業をめぐって、台湾の耕作権、南京の都市的土地登記、江蘇の農村的土地登記、そして廣東の郷の境界という多彩な4つの報告が行われたが、このコメントでは、その時空について四川農村という対照項目を置くことによって相対化を試みると同時に、近代への移行という文脈が共有されていることを再確認したい。

1. 中国農村集落の地域区分

土地調査事業が個別の地筆レベルの公的把握とみなされることから、それに関与する空間も自ずから基層空間となる。ここにいう基層空間とは農村においては集落や村落、郷鎮であり、都市においては街区や社区をさす。

とくに農村における基層空間を考える場合には、中国という広大な空間の内包する多様性を考慮する必要がある。それを整理して示す一つの図が、金其銘によって作成された「中国農村集落の地域区分」であろう【図1】。

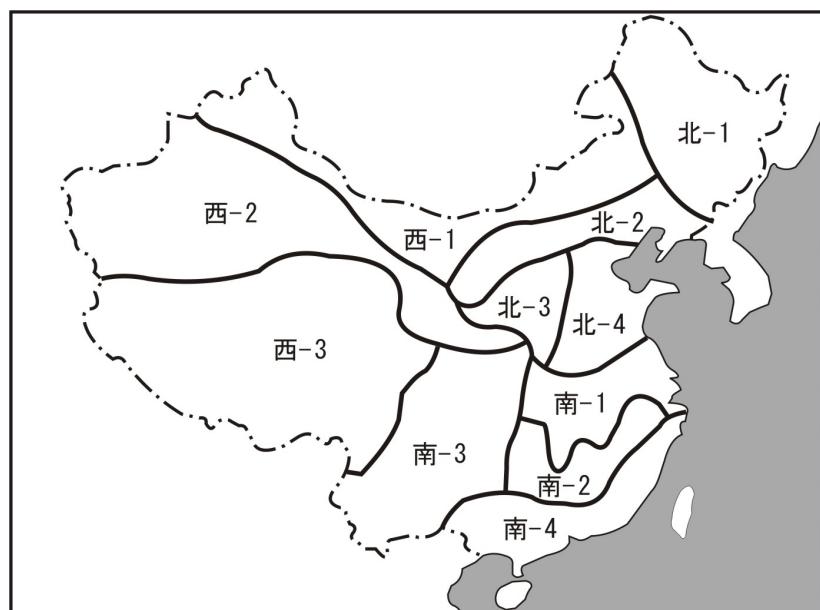


図1 中国農村集落の地域区分

金其銘《中国農村聚落地理》江蘇科技出版社、1989年により作成

集落形態や生業から区分されたこの地域区分においては、農業中国は北部と南部に大きく2分されている。これが畑作地帯と水田地帯をベースとした区分であることは明確であるが、集落規模は、北が大きく、南が小さいと概括される。

その意味では 10 戸で甲、100 戸で保を編成してゆくような戸数原則が社会編成に用いられてきたのは、集落の多様性を捨象するためには有効であったと言えよう。しかし、それが実際に地域において適用される場合は、集落の多様性と向かい合うことになる。

南-1 に属する江南デルタにおいては、それは十数戸程度を標準とする小村が基層空間に影響を与える、北-4 に属する華北平原においては数十戸からなる集村が基層空間を規定している。江南においては甲レベルで集落は存在し、華北においては保レベルで集落が存在していると考えができるのである。

郷の境界を対象とした片山報告がフィールドとした広東は南-4 に属している。この地域は集落類型からは南部に属するが、比較的規模の大きな集村が凝集性をもっており、それがこのサブカテゴリーの特徴である。その意味では江南的というよりも華北的な基層空間を想定することができる。郷として把握されているのもこの基層空間であり、華北農村を対象として議論された「村の土地」の不在論を片山報告が再検討するには、集落規模の面からみてふさわしい地域設定と言うことが出来る。

では集落としては最も小さな規模を特徴とする南-3 に属する四川においては、郷をめぐって如何なる状況が存在していたのか、考えてみたい。

2. 四川の郷

四川盆地の北西に位置する三台県の郷数はこの 100 年で大きく変化してきた【図 2】。

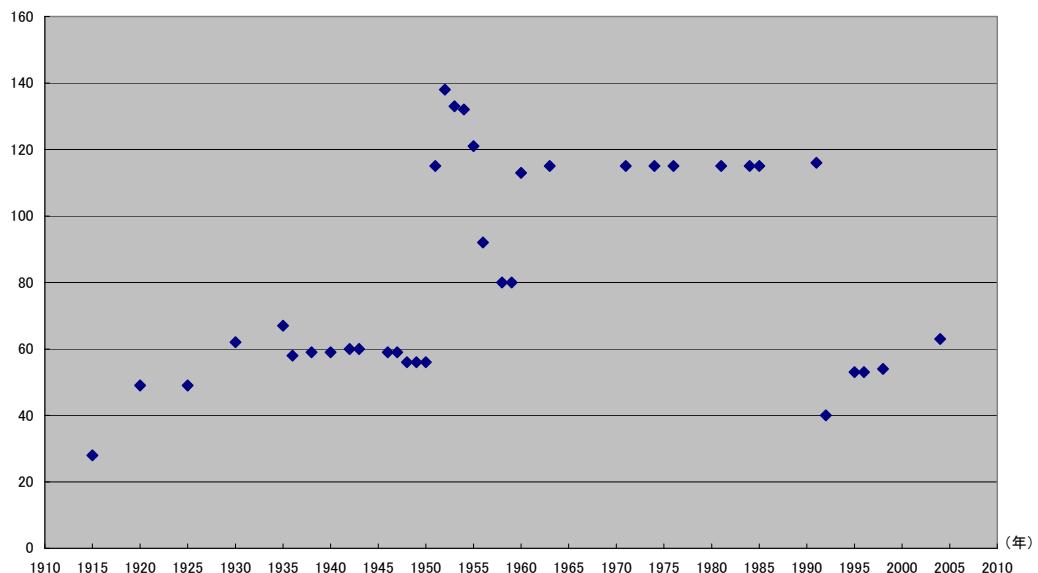


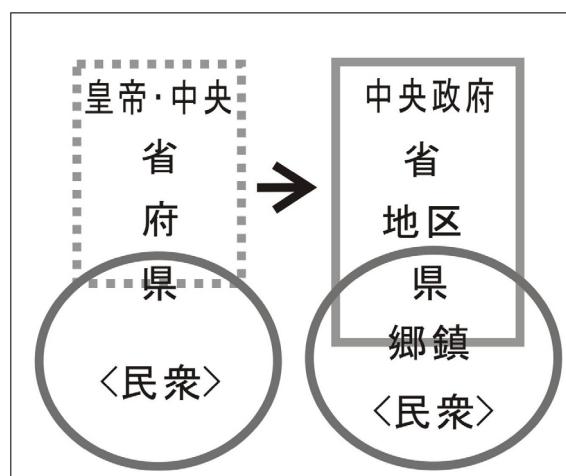
図 2 三台県の郷数変遷

このグラフからは民国期の増加と 1950 年代の激変、集団化期の安定、そして 1990 年代以降の統合を読み取ることが出来る。四川農村において郷とは固定的な範域を有する歴史的領域ではなく、時代の変化に応じて変化するものとなってきたのである。

4 報告が対象とする時期に焦点をあわせて四川の郷の変遷を振りかえると、国民党が統治を確立し、「大後方」となった 1940 年に施行された新県制のもとで、郷が領域化されてゆく時期にあたる。

3. 近代的な空間編成

領域化とは個人や集団によって区切られ統制されている空間の内部に存在する統制とそれをめぐる関係を指す概念であり、一般に近代的な国家形成においては、基層空間の領域化が進んでゆく。その近代的な空間編成を図式化して表すと、次のように描くことができると考えている【図 3】。



左側に配置された前近代においては、王朝から連続する国家の領域性は限定的で、その一方、基層社会は民衆の生活世界ともいべき機能的な高さを有していた。近代的編成をうけたこの関係は、右側に示すように、民衆の生活世界は近年までその機能と局地性を保ちつつ、一方で国家という領域の機能強化が進んだと考えられる。そしてその空間編成は県で止まっていた基層空間の上からの編成を、郷レベルに拡大することが要請されたと考えられる。

今回のワークショップの 4 報告は、地域や対象が異なる位相に置かれるものの、こうした基層に国家が手を入れてゆく過程を共通して描き出しているとみなされる。